

## 小さな旅

小山千枝子

今年の冬はほんの小さな旅から始まりました。雪景色をスケッチしたいという絵の仲間一行7人。

高崎発鈍行電車はガラ空きで、乗客は所在ない顔して車窓に見入っているのです。右手には赤城の雄姿が裾野に至るまで広がり、その左後には白銀に輝く上州武尊山。左手には獅子岩も鮮明な子持山、榛名の嶺々、水沢山と続きます。上州に住みながら感動もひとしお。これもお正月の澄んだ空気と鈍行電車の賜と思いました。目的地片品村戸倉へは沼田駅からタクシーで。夏ならば一時間足らずの道のりも、雪道とあってはさもならず二時間近くかかったでしょうか。除雪車のお陰で運転はさほど難儀でもないようでした。シーズンには三百面ものテニスコートが若者で賑うという片品も、長いつららを簾よろしく雪の中に眠っているようでした。

その夜の宿「ロッジ長蔵」ではスタッフ一同の暖い出迎えを受け、太い薪がとろとろ燃える暖炉を囲み、先ずは一服。あかあかと燃える炎の生み出す暖炉の優しさが身に沁みました。やがて遠来の客を歓迎するかのように雪が舞いはじめました。この美しい自然の前についに絵筆は動かなかったのです。

その夜のおめあてはロッジが計画している枕木小屋での「いろいろと岫と珍味の会」への参加でした。枕木八百本を材料にスタッフが造りあげたという小屋は頑丈そのもの。さほど広くない小屋の中央に大きないろりが設えられ、山盛された炭火がダイナミックに炎をあげて客を待っていてくれました。天井からはランプの灯、窓からは降りしきる雪の明り、熊の毛皮の敷物、半纏に至るまで用意され、至れり尽せりのセットです。そしてこの会のホステスは、かの尾瀬長蔵小屋の女主人平野紀子さん、ホスト役は長蔵小屋のキャリア二十年というHさん。自然大好き、尾瀬大好き、お酒大好きのお○男女十余名の珍味の会がはじまりました。えも言われぬ美酒で乾杯したあと、先ずは鯉の寒風ざらし串焼きから。その美味は言うに及

ばず、次から次へと精選された山の珍味が振舞われてゆくのでした。ひとかかえもある大鍋にあふれんばかりの特製けんちん汁など食べ放題。身も心も暖まるとはこのことと感激しました。

岫がこれまた素敵なのです。枕木小屋のすぐ裏にスタッフ手造りという小さな小さな岫がありました。少し温めの温泉を薪でボンボン焚いて、熱い湯が深い湯船に溢れています。その湯のまろやかなこと。ふりしきる雪の窓を開け放ち、雪明りとランプの灯。こうあっては唄のひとつも出てこようというものです。小屋でのご馳走を気にしながら、2、3人ずつ交替で岫に入りました。

ロッジに帰る道には、膝までつかる程に新雪が積っていました。長靴で一歩一歩踏みしめながら、この夜のぜいたくを喜び合ったことです。

翌朝は快晴。スキーに行く人と別れて、近くの「いわつばめ文庫」に行ってみました。尾瀬長蔵小屋の三代にわたる主の心意気が伝って来るような気がしました。すぐ隣に住んでいらっしゃる二代目長英氏の未亡人靖子さんを訪ね、尾瀬に寄せる熱き想いをいろいろと伺わせて頂きました。八十五才とは思えないかくしゃくとしたお姿に接し、尾瀬を愛して生きた人に“貫ぬく棒のようなもの”を感じとりました。

群馬に住みながら縁遠かった尾瀬が、俄かに身近かに感じられ、これも新年早々に思い立って旅した余得と思っています。それにしても、自然を愛し、尾瀬を愛して一生懸命に生きている人達の姿に、ほんの少し触れるだけでしたのに、大きな宝物を得たような満足感が残った旅ではありました。

これを読んで下さって、お出かけになってみたいと思われる方のために連絡先を記しておきます。きっと親切なスタッフのお返事に出合うことでしょう。

「ロッジ長蔵」(尾瀬入山口)

〒378-04 群馬県利根郡片品村戸倉

TEL. 0278-58-7443

(3回生)